

馬融「広成頌」と後漢の田獵・軍礼

佐藤達郎

はじめに

漢代、上林苑など都近郊の御苑で盛んな天子遊獵（田獵、校獵）が行われ、贅の限りを尽くした狩獵と宴樂が催されたことは、司馬相如「上林賦」などの詩賦を通じてよく知られている。そしてそれらが周代以来の天子田獵の伝統を承け、そこに軍事儀礼の意が寓されていたことについても、宋・王忠麟『玉海』（卷百四十四「講武 田獵上」）以来多くの先学が指摘してきた所である。前漢武帝期の司馬相如から前漢末の揚雄、後漢の班固、張衡、馬融らの田獵賦の系譜とその変遷、またそこに表現される軍事儀礼のあり方の変遷と宴樂の意義などについては、別稿で詳しく論ずる予定だが、本稿では補遺的作業としてそれらの中から特に馬融の賦作「広成頌」を取り上げ、その背景と特質について些かの検討を試みたい。漢代の賦は天子の制度の盛容を絢爛たる修辭によって称揚しつつ、最後に奢侈を諫め節儉を勧めるのが一般であり、司馬相如や揚雄、班固らの田獵賦に於いても過度な放逸の諷諫と儒道への回帰が説かれる。それに対し、「広成頌」は先学も指摘するように田獵と宴樂の盛容をひたすらに賛美し、文武両道の美風を勧めるのであり¹⁾、一代の儒宗たる馬融の作ながら儒術尊崇の風が世を覆った後漢時代にあつて特異なあり方を見せている。彼の尚武の言説の因つて来るところは何か、「広成頌」が作られた背景とその内容の検討、および後漢時代の

軍札との対照などを通じて考えてみたい⁽²⁾。

一 馬融と「広成頌」

弟子の鄭玄とならぶ後漢随一の大儒、馬融(79-166)は、光武帝期に南越遠征に殊勲を著した伏波將軍・馬援を大叔父とし、またその娘・明帝馬皇后を族母にもつ貴顕の家に生まれた。彼の生涯とその経学については池田秀三氏が詳しく紹介し、また近年、呉從祥氏の詳細な年譜が出たが⁽³⁾、さしあたりここでは必要な範囲で彼の前半生を略述すると、将作大匠・馬嚴の子として生まれた彼は若くして俊才を知られ、京兆の処士摯恂のもとで経学を修めた後、永初二年(108)に大將軍鄧騭の幕府への聘を受けた。鄧騭は和帝鄧皇后の兄であり、時に清河王国から十三歳で迎立された安帝の背後で鄧太后が臨朝称制を行っていた。外戚の勢家に仕えることを潔しよしとせずしてか、馬融は鄧騭の聘を断り涼州に客居する。そこで遭遇したのは永初の羌族大乱、いわゆる「元二の厄」であり、餓死者相次ぐさまを目の当たりにしつつ自身も飢困に苦しんだ末、彼は意を翻して帰京し鄧騭のもとに仕えることとなった。

ここで少し考えたいのは、彼がこの時期涼州に客居した理由についてである。彼が鄧騭の聘を受ける前年の永初元年夏には、西域遠征への徴兵をきっかけとして涼州一帯の諸羌族が一斉に蜂起し、同年冬には車騎將軍鄧騭の遠征軍が派遣されるも、あえなく敗退を喫している。馬融が涼州に趣いたのはまさにこうしたさなかであり、あえて火中の栗を拾うかのような彼の行動の背後には何かしら強い動機があったと思われる。涼州はかつて彼の大叔父・馬援が兄の員とともに王莽政権崩壊後の禍乱を避け一時身を置いた地であり、援はその後、隴西の隗囂政権をへて光武政権に帰順し、隗囂滅亡後には涼州平定に活躍、さらに隴西太守として西羌の鎮定に頭功を挙げている(『後漢書』馬援伝)。六年間の隴西太守在任中、寛信の治によって「賓客故人、日び其の門に満」ちたというこの大叔父の遺徳と人

脈を、馬融は頼ったのではなからうか。想像を逞しくするなら、永初二年のはじめ羌乱平定に失敗し帰京した鄧騭のふがいないさまを目にした（これもその辟召を辞去した一因かもしれない）馬融の脳裏には、大叔父の西羌平定の武勲や方策と、その血筋を自らが受け継ぐとの自覚があったかもしれない。後にも述べるように、彼もまたこの大叔父や父たちと同じく任侠を好み壮志にはやる青年であった。

しかしそうした意気込みも、苛酷な現実を前にあえなく潰えたであろう。「古人言う有り、左手は天下の凶に拠り右手は其の喉を刎ぬるは愚夫も為さずと」。友人に語ったという当時の彼の言葉も、そんな蹉跌を裏付けるかのである。後悔挫折の念とともに帰京した彼は、鄧騭の府僚をへて永初四年、校書郎中として東觀校書に従事することとなった。時あたかも東觀には劉珍、劉駒駘らの学者が集められ、後に『東觀漢記』と呼ばれる史書とともに礼典の編纂が進められようとしていたことはかつて別稿でも述べた所であり⁴⁾『後漢書』安帝紀に「(永初四年二月) 謁者僕射劉珍及び五經博士に詔して東觀の五經・諸子・伝記・百家の芸術を校定し、脱誤を整齐し文字を是正せしむ」とある通りだが、その推進者こそは鄧太后であった。幼きより経芸に深く心を寄せ「諸生」の異名をとった彼女は、臨朝称制下にあっても「昼は王政を省、夜は則ち誦読す、而してその謬誤を患え、典章に乖くを懼れ、乃ち諸儒劉珍等及び博士・議郎・四府の掾史五十余人を博選し、東觀に詣りて伝記を讎校せしむ」(『後漢書』和熹鄧后紀)。また張衡伝にも「永初中、謁者僕射劉珍・校書郎劉駒駘等、東觀に著作し、漢記を撰集し、因りて漢家の礼儀を定めんとして上言し、衡の其の事に参論せんことを請うも、会たま並びに卒せり」と記される。そして、この動きの中に馬融も参与することとなったのである。「(劉珍) 永初中、謁者僕射となる。鄧太后、詔して校書の劉駒駘・馬融及び五經博士とともに東觀の五經・諸子伝記・百家の芸術を校定し、脱誤を整齐し、文字を是正せしむ」(『後漢書』文苑劉珍伝)。

この東觀校書事業が単なる文献のテキストクリティークにとどまらず、同時代の王朝史すなわち『東觀漢記』の編

纂、さらには礼典の編纂計画にまで及んだことは右に引く張衡伝に見える通りであり、そして先述の別稿で述べたように、未完に終わったこの礼典（「漢家礼儀」）編纂においては漢朝の典章制度を「周礼に依擬し、位を定め職を分かち、各の条序有らしめ」て叙述することが企図されたのであった。この編纂計画に、後年『周官伝』を著し周礼学者に名を連ねる馬融もさだめし一定の役割を期待されたであろうし、こうした気運の中で彼の胸中には王朝のあるべき典制への想念が萌していたに違いない。

彼が校書郎中として東觀著作にいそむ間にも、西方の羌乱は熾烈の度を増しつつあった。元初二年（115）、護羌校尉の龐参は羌胡の混成部隊を率い、左馮翊の司馬鈞とともに先零羌の鎮庄に出撃した。龐参の分隊は敵勢に阻まれ、単独で進んだ司馬鈞の軍は敵の伏兵に遭って大敗、敗績の罪を問われて鈞は自殺し、龐参も獄に下された。この彼を敢然と弁護したのが馬融である。

伏して見るに西戎反畔し五州を寇鈔す、陛下 百姓の傷痍を愍れみ、黎元の失業を哀しみ、府庫を單竭し以て軍師に奉ず。昔周宣 獫狁は鎬及び方を侵し、孝文 匈奴も亦た上郡を略す、而して宣王は中興の功を立て、文帝は太宗の号を建つ。惟だに両主明叡の姿有るのみに非ず、抑も亦た扞城に虓虎の助有ればなり、是を以て南仲の赫赫たる、列して周詩に在り、亜夫の赳赳たる、漢策に載す。窃かに見るに前の護羌校尉龐参、文武昭らかに備わり、智略弘遠たり、既に義勇果毅の節有り、兼ねるに博雅深謀の姿を以てす。又た度遼將軍梁懂、前に西域を統べ、勤苦せること数年、還りて三輔に留まれば功効克立し、問ろ北辺ちかに在れば単于降服す。今皆な幽囚せられ、法網に陥つ。昔荀林父は邲に敗績し、晋侯其の位を復せしむ。孟明視は師を崤に喪い、秦伯其の官を替えず。故に晋景は赤狄の土を并せ、秦穆は遂に西戎に覇たり。宜しく速く二君を覽、参・懂をして寛宥の科に在るを得しむれば誠に折衝に益有り、聖化を毗佐せん。（『後漢書』龐参伝）

周宣王の軍師として西戎を征伐した南仲、対匈奴戦線での名将ぶりで文帝を驚嘆させた周亜夫、さらにひとたび師を喪いながら後に戎狄を制した荀林父、孟明視ら往古の事例を挙げつつ、馬融は羌胡平定に功のあった龐參、梁懂兩人の赦免を求め、それは聞き入れられた。ここには彼の尚武の志向とともに、西北情勢への強い関心を見て取ることもできよう。

彼が「広成頌」を鄧太后に上るのは、実にこのような出来事のあった頃であった。『後漢書』の彼の伝には次のように記される。

是の時鄧太后臨朝し、鷹の兄弟政を輔く。而して俗儒世士以為らく文徳興る可し、武功宜しく廢すべしと、遂に蒐狩の礼を寝め、戰陳の法を息む、故に猾賊從横し、此の無備に乗ず。融乃ち感激し、以為らく文武の道は、聖賢墜とさず、五才の用、或いは廢す可き無しと。元初二年、広成頌を上り以て諷諫す。

すなわち彼の「広成頌」献呈の動機は「俗儒」らの武功軽視と蒐狩戦陣の伝統的軍礼の廢止、その結果としての外寇の危機にあり、そこで發憤した彼は文武両道の道をお説く「広成頌」によって諷諫を試みたのだという。元初二年といえはちょうど彼が龐參を弁護した年であり、そうであればこの事件が「広成頌」献呈の一背景として大きな意味をなしたことになる。ところがこの年次には疑義が呈せられており、これを元初五年(118)の誤りとする説も有力で、呉氏の年譜はそれに従っている。決め手はないものの、池田氏も疑うようにこの前後の『後漢書』の年代記述には矛盾が見られ、二年を五年の誤りと解するのが多分に整合的ではあるため、本稿でも且くその説に従っておきたい。元初五年であつても、三年前の龐參弁護に見られた彼の問題意識や姿勢はなお強く彼の心にあつたはずである。さらに元初五年であつたとすると、次の出来事に注目される。同年、平望侯劉毅は、鄧太后の徳多きを以て彼女の起

居注および聖徳頌を史官に編纂させるよう、安帝に上書した（『後漢書』和熹鄧后紀）。劉毅は、従弟の劉駒駱らとともに鄧太后の詔によって東觀校書事業に参加した一人である（『後漢書』宗室四王三侯伝・北海靖王興）。馬融のいう「俗儒世士」とはあるいは彼らを暗に指すのではなからうか。西北の危難のさなかに講武の軍札を顧みず、いたずらに鄧太后の徳を讃える彼らの姿勢が、馬融の目には女主への諂諛と映じたのではなからうか。

さて「広成頌」は次のような序文に始まる。馬融伝の先の引用に続いていう。

其の辭に曰く。臣聞くならず、孔子曰く「奢れば則ち不遜、儉なれば則ち固し」と。奢儉の中、礼を以て界と爲す。是を以て蟋蟀・山枢の人、並びに国君を刺り、諷するに太康馳驅の節を以てす。夫れ樂しみて荒れず、憂えて困しまざるは、先王の府蔵を平和し、精神を頤養し、之を無疆に致すが所以なり。故に戛擊鳴球は虞謨に載せ、吉日の車攻は周詩に序す。聖主賢君の以て盛美を増すは、豈に徒に奢淫が爲にせるのみならんや。伏して見るに元年已來、厄運に遭値し、陛下災異を戒懼し、躬自ら菲薄し、禁苑を荒棄し樂懸を廢弛し、勤憂潜思せること十有余年、以て礼数を過ぐ。重ぬるに皇太后は唐堯の九族に親しむ篤睦の徳を体し、陛下は有虞烝烝の孝を履むを以てし、外舎の諸家、憂疾有るが毎に、聖恩もて普く勞い、遣使交も錯え、稀に眩絶有るのみ。時時に寧息するも、又た以て自ら娛樂する無きは、殆んど太和を逢迎し、万福を裨助する所以に非ざるなり。臣愚以為らく尚お頗る蝗虫有りと雖も、今年五月以來、雨露時に澍うるおい、祥応將に至らんとす。方に冬節に涉り、農事の間隙に、宜しく広成に幸し、原隰を覽じ、宿麥を觀、収蔵を勧め、因りて講武校獵し、寮庶百姓をして復た羽旄の美を睹、鍾鼓の音を聞き、歡嬉喜樂し、疆畔に鼓舞せしめ、以て和氣を迎え、休慶を招致すべし。小臣螻蟻たるも、区区たるに勝えず。職は書籍に在り、謹んで旧文に依り、重ねて蒐狩の義を述べ、頌一篇を作し、並びに封じて上らん。浅陋鄙薄にして、觀省に足らず。

まず彼は『論語』（述而）『詩』（唐風蟋蟀・山有枢）を援引して太倭失節の過ちを難する一方、音楽と田獵の伝統を『書』（益稷）『詩』（小雅車攻）を挙げて称揚し、盛美な典札が奢侈に非ずして聖主賢君の正しい道であることを述べる。続いて近年の現状に話は移る。「元年己未」の元年とは、章懷注に「安帝即位之元年」とありまた後に「十有余年」とあれば、元初五年を遡ること十一年、安帝即位の延平元年（106）もしくはその前年、殤帝即位の元興元年（105）を指すに違ひなく、それはとりもなおさず鄧太后の臨朝称制を行ってきた期間であることは呉氏らの指摘の通りである。この間、既述のような西北の羌族大乱に加え干魃洪水や地震などの天災が相次いだことは、永初五年の鄧太后の詔に「災異蜂起し寇賊縱横す、夷狄夏を猾みだし戎事息まず、百姓匱乏し徴発に疲れ、重なるに蝗蟲滋生し、害は成麥に及ぶを以てす」とある如くである。なおほぼ同一趣旨の詔勅が前年にも出ていることが近年発見の長沙五一広場東漢簡から知られ⁵⁾、これを重申したものが翌永初五年の詔かもしれない。このような状況とそれへの危機意識が当時常態化していたことが窺われよう。

こうした認識のもと太后は永初三年の詔で歳末の衛士交替儀式「饗遣故衛士儀」⁶⁾における百戯作楽の中止を命ずる。「永初」三年秋、…旧事、歳終に衛士を饗遣するに当り、大難逐疫す。太后 陰陽和せず軍旅數ば興るを以て、詔して饗会に設戯作楽すること勿らしめ、逐疫の俵子の半ばを減じ、悉く象囊駝の属を罷む」。軍事儀礼としての饗遣故衛士儀とそれに続く儺祭、またそれらに際する百戯作楽の意味については別稿で改めて検討することにしたいが、このような鄧太后の節儉と各種の祝宴の中止・縮小はこのときにとどまらぬこと先学も指摘する所であり、安帝即位の延平元年十二月乙酉には、帝の実父・清河孝王慶の薨去ゆえもあろう、「魚龍曼延百戯を罷め」（『後漢書』安帝紀）、翌永初元年九月には「壬午、太僕・少府に詔して黃門の鼓吹を減じ以て羽林の士に補す。廐馬の乘輿の常に御する所に非ざる者、皆な半食を減ず。諸ぞ造作せる所、宗廟園陵の用に供するに非ずんば、皆な且く止む」、さらには「永初」四年春正月元日、会するに、楽を撤し、充庭車を陳べず」（同前）という。馬融の盛美なる礼楽、とり

わけ軍事儀礼としてのそのの頭揚がこうした太后臨朝下の、馬融の目には過度の節儉を背景とすることは疑いない。かくして彼は、時節の小康にちなみ広成苑への行幸と「講武校獵」の実施を提言する。広成苑は河南尹新城県下の広成聚に設けられた御苑で（『統漢書』地理志）、後漢の皇帝はしばしばこの地で遊獵を行った。なおこの禁苑での天子遊獵が「寮庶百姓をして復た羽旄の美を睹、鍾鼓の音を聞」かしめるというのは、そこが完全に人民の閉め出された空間ではなかったことを示唆するが如くだが、その点については別稿で改めて検討したい。

右の序文に続いて賦は次のように書き起こされる。

臣聞くならく昔 師に鞬囊を命じ、伯を靈台に偃め、或人嘉して焉を称す。彼れ固より未だ夫の雷霆の天常為り、金革の昏明を作すを識らざるなり。黃炎自りの前、伝道記す罔し。三五以来、越に略ぼ聞く可し。且つ区区たる酆郊も猶お七十里の囿を廓き、春秋の苗を盛んにす。詩は圃草を詠い、樂は騶虞を奏す。是を以て大漢の初めて基するや、茲の天邑に宅り、風雨の会を総べ、陰陽の和を交う。厥の靈囿を揆り、南郊に営む。徒だ其の坰場区宇を觀るに、恢胎眩蕩として、藐覲勿罔、寥豁鬱決たり、千里を聘望し、天は地と莽たり。是に於て周陸環瀆、右は三塗を疊、左は嵩岳を概くし、衡陰に面拗し、王屋を箕背し、浸すに波澇を以てし、うろむ奮すに滎洛を以てす。金山石林は殷んに其の中に起ち、峨峨磴磴たり鏘鏘崔崔たり、隆穹槃回、嵒崕錯崔す。神泉側出し、丹水渥池あり、怪石浮磬、其の陂に耀焜す。其の土毛は則ち推牧、薦草、芳茹、甘荼、苾萑、芸菹、昌本、深蒲、芝蒟、葦萱、蓂荷、芋渠、桂荏、鳧葵、格菹、蒞于。其の植物は則ち玄林包竹、陵を藩し京を蔽う、珍林嘉樹、建木叢生し、椿・梧・栝・柏・柎・柳・楓・楊、豊彫对蔚たり空頌穆爽たり。春風を翕習し、津を含み榮を吐き、鋪于布濩す、葳扈蕤燐、いすく悪んぞ形を殫くす可けんや。

周武王が克殷のち軍を休止した故事を、ある人が假武の嘉事として賞賛するのに対し、それは用武が王朝の興亡に関わる天の常道であることを知らぬのだと断ずる。そうして上古から周代の苑囿における田獵の伝統を述べ、ついで後漢広成苑（厥の靈囿）の章懷注に「言作広成苑以比之」とす）の宏大な自然景觀の偉容が、司馬相如以来の絢爛たるレトリックを駆使して謳われる。次からは、いよいよ孟冬の苑囿田獵の情景描写に入る。

陽月に至り陰曆害作し、百草畢落す、林衡 田を戒め、菜を焚き木を柞る。然る後に天網を挙げ、八紘を頓え、九藪の動物を撃斃し、四野の飛征を纒囊す。之を茲囿の中に鳩め、山のごとく敦まり雲のごとく移り、群鳴膠膠たり、鄙駭として噪譟す、子野も聴聳ぎ離朱も目眩み、隸首も策乱れ陳子も籌昏む。時に於て営囿恢廓は川谷に充斥し、罽罍羅罽は阮沢を弥綸し、陵山を臯牢す。校隊は部を案じ、前後に屯有り、甲乙相い伍し、戊己を堅と為す。

陽月すなわち孟冬十月、司田の官―後漢では上林苑令に該当しよう―が御苑の草木を払い、狩り場を準備する。そうしてあまたの鳥獸を苑囿に集め、羅網牢柵を設け、軍隊が部伍を整えて出撃の準備をする。ついで天子出行と狩りの開始が神話的に描かれる。

乘輿乃ち吉月の陽朔を以て疏鑿の金路に登り、驪騭の女竜を六にし、雄虹の旌夏を建て、鳴鳶の脩幢を掲ぐ。長庚の飛鬣を曳き、日月の太常を載せ、招揺と玄弋を栖まわせ、枉矢を天狼に注ぐ。羽毛は紛として其れ影馳し、金嬰を揚げて玉瓊を抛らす。田車を平原に屯め、同徒を高岡に播き、旃旛は摻として其れ林の如く、五色を錯え以て光を摘ぶ。氛埃を清め、野場を埽き、六師に誓い、俊良を搜す。司徒は卒を勒め、司馬は行を平し、車は攻

く馬は同い、教は達し戒は通ず。咎鼓を伐ち華鍾を撞けば、獵徒は縦たれ榛叢に赴く。微嬪霍奕として驚を別ち分れ奔り、騷擾聿皇として往来し交も舛い、紛紛回回として南北東西す。風のごとく行り雲のごとく転じ、匈磕隱訇たり、黄塵勃滂たり、闇きこと霧昏の若し。日月も之が為に光を箠め、列宿も之が為に翳昧たり、禦狡は才を課し、勁勇は氣を程す。狗馬は角逐し、鷹鷂は競驚し、驍騎は旁に佐け、軽車は横まに厲い、相い与に陸梁し、中原に聿皇たり。猥蹄を絹ぎ、特肩を縦き、完羝を脰き、介鮮を搗き、毛族を散じ、羽群を枯る。然る後に飛艇は電のごとく激し、流矢は雨のごとく墜ち、各の質す所を指し、期せずして俱に殪れ、竄伏せるもの輪に切かれ、発作せるもの轉に梧かる。殺受狂撃せば、頭は陥り顛は碎かれ、獸は獠るを得ず、禽は驚るを得ず。或いは夷由して未だ殊せざるに、顛狼頓躓、蝮蟬蟬として衢に充ち隧を塞ぎ、葩華して萍のごとく布くこと、勝げて計う可からず。

天子は六駕の乘輿に駕し、旌旗金鼓を建てて嚴かに行進しやがて平原に車を屯める。六師に誓約を布き、軍令を三令五申したのち合図の金鼓の音とともに兵は一斉に放たれる。彼らが野を激しく駆け巡り、獵犬乗馬、鷹狩りの隼とともに種々の禽獸を射かけ、捕らえれば、打ち殺された、あるいは瀕死の獲物が累々と一帯を覆う。以下、猛獸飛鳥を勇士たちが追い詰め打ち捕らえるさまが縷々描かれる。

若し夫れ驚獸殺虫、倨れる牙に黔き口、大匈にして哨後、縕巡欧紆して隅を負み阻に



出行・狩獵・樂舞百戲圖 『微山漢画像石選集』（文物出版社、2003年）より

依り、敢えて嬰禦する莫し。乃ち鄭叔・普婦の徒をして、睽孤にして刳刺し、裸裎袒裼せしむ。甯柘を冒し、棘枳を槎り、浚谷を窮め、幽嶰に底り、斥虎を暴ち、狂兕を搏ち、鬪熊を獄え、封豨を拏す。或いは輕紗趨悍にして、蝮領を虜疏し、嵩巒を犯歴し、喬松に陵り、脩櫛を履み、邊枝を蹕び、標端を抄し、蒼雉を尾き、玄猿を拏き、木産は尽き、寓属は単く。罕罔は部を合し、罽弋は曲を同にし、類行して並びに駆け、星のごとく布きて麗属し、曹伍相い保ち、各の分局有り。矰落は飛ぶのごとく流れ、緋羅は絡縵し、遊雉は群驚し、晨晷は輩作し、翬然として雲のごとく起ち、霄爾として電のごとく落つ。

ここでは合部、同曲、曹伍など軍隊の部曲編制に関する語が比喩的に用いられていることに注意したい。さて勇猛な狩りが終わると天子は車を廻らせて天界の神々のもとに巡幸し、やがてふたたび御苑に降り立つと池のほとりに休らう。

爾して乃ち巒とよく観て高きに踏み、乗を改め轅を回らせ、恢方を浜り、馮夷を撫し、句芒を策ち、荒忽を超え、重陽を出で、雲漢を厲り、天潢を横ぎる。鬼区を導き、神場を徑り、靈保に詔し、方相を召し、厲疫を馭り、蚺祥を走らす。罔罔を拏のぞき、游光を払い、天狗に枷し、墳羊を縲つなぐ。然る後に節を緩め容を舒べ、裴回安歩し、降りて波鑿に集えば、川衡沢虞は魚を矢やね罟を陳ぬ。茲飛、宿沙、田開、古壘は、終葵を輦かい、閔斧を揚げ、重氷を刊り、蟄戸を撥き、潜鱗を測り、介旅を踵なぬ。逆えて湍瀨に狙し、洿薄汾橈して潭淵に淪滅し、左に夔竜を挈り、右に蛟鼉を提げ、春は王鮪を献じ、夏は鱉鼈を薦む。是に於て流覽遍照し、変を彈くし態を極め、上下に究め竟くせば、山谷蕭条たり、原野嶢嶢たり、上に飛鳥無く、下に走獸無し、虞人は旂を植え、獵者は具を効し、車は弊れ田は罷み、旋りて禁園に入る。昭明の観に栖遲し、高光の榭に休息し、以て宏池に臨む。鎮むるに瑤台

を以てし、純るに金堤を以てし、樹うるに蒲柳を以てし、被うに緑莎を以てし、瀆漾沆漭たりて錯紵繫委す、天地は虹洞し、固より端涯無し、大明は東に生じ、月朔は陂に西す。乃ち壺涿に命じ、水壘を駆り、罔罟を逐い、短狐を滅し、鯨鯢を箝す。然る後に余皇を方べ、舳舟を連ね、雲帆を張り、蜺幃を施し、颶風に靡き、迅流を陵ぎ、櫂歌を発し、水謳を縦てば、淫魚は出で、蒼蔡は浮び、湘靈は下り、漢女は遊ぶ。水禽鴻鵠、鴛鴦、鷗鷺、鶻鵠、鷓鴣、鷺雁、鷺鷥、乃ち安んじて斯に寝り、翮を其の涯に戢む。魴鱖、鰻鰻、鰻鯉、鱧魛、我が純徳を染しみ、騰踊して相い随う、靈沼の白鳥、孟津の躍魚と雖も、斯に方ぶれば蔑たり。然して猶お伶蕭に詠歌し、方策に載陳せらる、豈に哀しからずや。

天界の神々に関する叙述の中で「方相を召し厲疫を駆り蚺祥を走らす」とあることに注目される。これは歳末の大儺の情景を描いたものである。その儀式次第は後掲の『続漢書』礼儀志中に詳しいが、ここでは方相氏の面をかぶり熊皮をまとった演者や百二十人の童子「侏子」たちが宮中で松明をかかげ、罔兩蚺鬼など疫病をもたらす悪鬼退散の儀を盛大に執り行う。唐開元礼では軍礼に分類されるこの現実の儀礼を、ここでの描写はふまえているのである。なお先述の如く鄧太后はこの祭儀に対して「逐疫の侏子の半ばを減ず」との節減を行っている。その後の宏池（岸田首相の宏池会はこれが典故）での観覧、諸瑞祥の湧出も、実際に田獵後の宴会で催される、かぶり物を交えた種々の百戯を意識した描写であることは、後日別稿で張衡の「西京賦」に関連して再び論ずる予定だが、これら百戯に対しても鄧太后は「魚龍曼延百戯を罷め」ていること先述の通りである。

最後に、宗廟薦亨と戦士たちへの論功班賜、ついで盛大な宴飲が催される。楽が奏でられ、四夷が来貢し、儀式はクライマックスを迎える。

是に於て宗廟既に享け、庖厨既に充ち、車徒既に簡び、器械既に攻かたし。然る後に牲を擺き禽を班ち、淤賜して功を犒い、群師は疊伍し、伯校は千重し、山疊は常に満ち、房俎は空く無し。酒正は隊を案じ、膳夫は巡行し、清醪は車もて漚ゆり、燔炙は騎もて將すむ、鼓駭きて爵を挙げ、鍾鳴りて觴を既す。若し乃ち陽阿袁斐の晋制、闍鼈華羽の南音は、匈臆に洞蕩し、耳目を發明し、蘊愴を疏越し、底伏を駭恫する所以なり、鎗鎗鎗鎗として農郊大路の衢に奏し、百姓と之を樂しむ。是を以て明德は中夏に曜き、威靈は四荒に暢り、東隣は巨海に浮びて入享し、西旅は蔥嶺を越えて來王し、南徼は九訳に困りて貢を致し、朔狄は象胥に属して來同す。蓋し安きに危きを忘れず、治に乱を忘れず、道は茲に在り、斯れ固より帝王の神武を曜かせ遐衝を折くく所以の者なり。

狩られた獲物はまず宗廟に捧げられる。後述のように『統漢書』礼儀志中に「立秋の日、白郊の礼畢り、始めて威武を揚げ、牲を郊東門に斬り、以て陵廟に薦む」とあり、後漢における講武礼においてまず宗廟に犠牲が薦められ、続いて武官への束帛賜与と軍事演習が行われたことに、これは対応するであろう。なお蔣晧光氏はこの賦の最後の段における一連の儀式が宗廟祭祀を首段に置くことを以て、本来帝・后夫妻で行うべき宗廟祭祀を鄧太后が率先し、自らの地位を上げようとしたことへの批判であったとするが、ややうがち過ぎに思われる。宗廟への言及は四字のみで、これは現実の軍事儀礼における宗廟薦亨の一節を踏まえたものに過ぎないと見た方がよからう。続く兵士への犠牲班賜と盛大な酒肉の宴―大室幹雄氏の言葉を借りれば漢代バロックの―は司馬相如以来の田獵賦の伝統的表現をつぐものだが、その場で奏でられる華美な音楽とその人心を疎通せしめる効用の顕揚、さらにはそれが百姓との和同、天子の徳の四裔までの暢達、そして四夷の來貢をもたらすという大同的ないし禹貢の世界観への接続が、本賦を顕著に特徴づけている。『論語』陽貨篇「樂と云い樂と云う、鐘鼓を云わんや」の何晏集解にいう、「馬曰く、樂の貴ぶ所の者は風を移し俗を易う、鐘鼓を謂うのみに非ず」。馬とは馬融のこと。音楽のもつ移風易俗の道義的効用はもとより伝

統的思想ではあれ、この注釈や「広成頌」における音楽の道義的顕揚の根底には、やはり彼の「鼓琴を善くし、吹笛を好んだ」という音楽の好尚、それと儒教的世界観との整合という志向があったはずである。そしてそのことが、音楽に彩られた盛美な典礼へと強く彼の心を向かわせ、またそれゆえに鄧太后の質朴節儉主義と背馳したことも、既に明らかであろう。

おわりに、賦は次のように締めくくられる。

方今大漢は功を道德の林に収め、獲を仁義の淵に致すも、蒐狩の礼を忽せにし、槃虞の佃を闕く。闇昧にして日月の光を睹ず、聾昏にして雷霆の震を聞かざること今において十二年、日を為すや久し。亦た方に將に禁台の秘藏を刊し、天府の官常を発き、質要の故業を由い、典刑の旧章に率わんとす。清原に采り、岐陽に嘉し、俊桀を登し、賢良に命じ、淹滯を挙げ、幽荒を抜く。淫侈の華譽を察し、介特の実功を顧み、吠畝の群雅を聘し、重淵の潜龍を宗とす。乃ち精を山藪に儲え、思を河沢に歴らせ、目は鼎俎を曬、耳は康衢を聴き、傳説を胥靡に營し、伊尹を庖厨に求め、膠鬲を魚塩に索め、甯戚を大車に聴く。之をして昌言して宏議せしめ、三家を軼越し、五帝に馳騁し、悉く休祥を覽、群瑞を総括す。遂に鳳皇を高梧に栖わせ、麒麟を西園に宿し、焦僥の珍羽を納れ、王母の白環を受く。永えに宇内に逍遙し、二儀と与に疆り無く、造化を后土に貳にし、神施を昊乾に参にし、超えて特達して儔無く、煥きて巍巍として原無し。千億の子孫を豊かにし、万載を歴て永えに延ぶ。礼樂既に関り、轅を北にして旆を反し、新城より至り、伊闕を背にし、洛京に反る。

田獵賦の結びは天子の徳政を称揚し、以て田獵の放蕩を戒め儒教的政道への回帰を推奨するのが、司馬相如や揚雄以来の伝統である。ところが本賦のこの段では、「大漢は功を道德の林に収め」と道德仁義に則った王朝の為政を讃え

ながら、一転して田獵の礼を十二年の間怠つてきたことが難ぜられる。先述のようにこれは鄧太后の臨朝称制の期間に他ならない。しかもそのため「日月の光を瞎ず」というのであり、これは日月＝皇帝夫妻をさしおいて実権を握り続けてきた太后への批判の意を寓するものであろう。そもそも田獵は天子の率先して行ふ儀礼であり、その挙行を主張することは、天子に政を帰すべきとの太后への批判を暗に含意してもいたはずである。

従つて、続いて主張される「質要の故業」「典刑の旧章」への回帰とは具体的には上古から前漢までの伝統的な田獵の復興、ひいては皇帝親政を意味してしよう。そうして実現される諸善政、賢良英才の登用や昌言善諫の採納とそれによつてもたらされる瑞兆の現出、王朝の無窮の繁栄（これらの描写の中にも山藪、河沢、西園など田獵のარიュージョンがちりばめられている）、これらも司馬相如以来の放逸奢侈の反省、徳政への回帰の描写に系譜を發し、後漢にあつては班固「東都賦」や張衡「東京賦」に継承され、前漢西京の田獵の奢侈と対比的に描かれるものだが、「広成頌」にあつてはそれが豪華な田獵と順接されるのである。換言するなら「広成頌」は班固西京の田獵における前漢西京のバロック的世界と後漢東京の礼教的世界とを接続したものと見えようか、むしろ班固は後者に重きを置くのではあるが。なお班固・張衡と馬融との關係については後述する。

賦を献呈した馬融は果たして、気性の激しい鄧太后の怒りを買つた。「頌の奏せらるるや、鄧氏に忤い、東觀に滞まり十年調せらるるを得ず。兄の子の喪に因り自効して帰る。太后之を聞きて怒り、謂えらく融は詔除を羞薄し州郡に仕えんと欲すと、遂に之を禁錮せしむ」。安帝に政を帰すべきを太后に直言した杜根が虐殺されかけた（『後漢書』杜根伝）のに比べれば、まだしも穏当な処置であつたとも言える。そこには貴顕の家につらなる少壮氣鋭の「通儒」に対する太后の苦心があつたかもしれず、また馬融自身もそれを当て込んでいた節がなくもない。その後も校書郎中より昇任できぬ不満から自効して官を去るといふ思い切つた行動には、かつて鄧鸞の聘を断つた血氣盛んな日の面影

がなお見えよう。しかしために受けた禁錮の処分は彼にとつて意外にも重いものであったようで、これに懲りた彼は後年曲げて梁冀の意に沿い、時人の評判を貶めることになったというが、その後も梁冀の意に忤い汚職を弾劾されて朔方に流される途上自刃を試みるなど、武俠好みの気節は終生衰えなかつたらしい。「鼓吹を善くし、吹笛を好み、儒者の節に拘わらず、居宇器服は多く侈飾を存す。常に高堂に坐し絳紗帳を施し、前には生徒に授け、後には女樂を列ぬ」。こうした派手好きで享樂的な人柄がまた世人の譏りを招き、それゆえ史書にはことさらその悪行が強調されることにもなったが、彼は世間の細節に拘らぬ任誕の通人として、自らの好尚に従つて生きたのだらうと思う。「広成頌」によつて太后を諫めた彼の中にあつたのもそのような、いささか鼻柱の強い自負ではなかつただらうか。

二 馬融をめぐる人脈…とくに田獵賦との関係で

最初に述べたように、馬融の「広成頌」は前漢から後漢に至る一連の田獵賦の系譜の中に位置するもので、従つて特に近い時代の人々との相互影響を念頭に置かねばならない。ここでは田獵賦の作者として馬融にやや先立つ班固および、ほぼ同時代の張衡との関係を確認し、また、馬融の尚武思想に関連して彼とつながりのある人物との関係を、推測も交えつつ確認しておきたい。

『漢書』の撰者、班固(32～92)のプロフィールについては(1)で紹介するまでもないが、彼は馬融と同じく扶風の人であり、周知のように前漢成帝に仕えた班婕妤を大叔母とする。同じく成帝に婕妤として仕えたのが馬援の叔母姉妹である(『後漢書』馬援伝)。また、先に述べたように馬援は莽新政権崩壊後の一時期、河西の竇融のもとに身を寄せたが、そこには班固の父、班彪もおり、二人の間には何らかの交流があつたはずで、班彪から馬援に送られた手紙の一節が残されている(『後漢書』劉龔伝注引『三輔決録』)。馬融は鄧太后の臨朝期、班固の妹の班昭(曹大家)

から宮中で『漢書』の講読を受け、また彼女の「女誡」を賞して妻女に習わせた。さらに馬融の兄の馬統は班昭の後をついで『漢書』の未成部分を完成している（『後漢書』列女伝・曹世叔妻）。このように班氏と馬氏との間には前漢末以来、馬融の時代に到るまで浅からぬ縁があり、馬融は彼が十三歳の頃に獄死した班固と直接に面識を持たなかったと仮にしても、彼が「東觀に在ること十年、典籍を窮覽し広成頌を上る」（『職官分紀』十六所引司馬彪『続漢書』）とある「典籍」の中に班固両都賦も含まれたことはほぼ疑いなく、また両者の数代にわたる縁を思えばそこから一定の影響を受けもしたに違いない。

辭賦に優れた文学者、かつ科学者としても名高い南陽の張衡（80～139）は馬融とほぼ同時代の人である。彼は馬融とともに涿郡の儒宗、崔瑗と親交を持ったことが知られ（『後漢書』崔瑗伝）、また『後漢書』王符伝にも「王符字は節信、安定臨涇の人なり。少くして学を好み志操有り、馬融・竇章・張衡・崔瑗等と友善たり」と記される。馬融の賦作と張衡のそれとの間に、相互の影響関係があったことは想像に難くない。なお付記したいのは、張衡と班固との関係についてである。張衡も班固とは直接の接触はなかったと思われるが、先述のように班固は馬融に一定の影響を与えたと考えられ、かつ張衡・馬融の親友であった崔瑗は、かつて別稿^⑧で触れたように、その父の駟が班固の推輓とともに竇憲に府僚として仕え、班固との間に何らかの交流を持ったとおぼしい。とするなら、崔瑗父子―馬融―張衡の人的紐帯の中に、班固の影響を想定することができよう。張衡が、時の踰侈を嘆き班固両都賦になぞらえて二京賦を作った（『後漢書』張衡伝）こと背景には、単なる形式上の模倣にとどまらぬ内的連関を考えてよさそうである。

こま―つ付記すべきは、王符（85?～163?）との関係である。『潜夫論』の著者として知られる彼は、先に別稿^⑨で述べたように故郷の涼州安定郡で処士として生涯を過ごし、自ら目の当たりにした羌族大乱をもとに、西北情勢に対する軍事的防備の必要を詳細かつ具体的に説いた。右掲王符伝によれば彼も馬融、張衡らと親交を持ったが、先に述

べた通り鄧鸞の辟召を断つた馬融は一時期涼州に赴いており、彼が客居した「武都・漢陽の界中」は王符の暮らした安定郡に隣接する。生涯を涼州で終えた王符がいかにして中原の諸士と交流を持ったか定かではないが、馬融との間には直接交流を持ち得た時期が二度あり、その一つがこの涼州客居の時、いま一度は呉氏年譜によれば順帝永和三年（138）、彼が武都太守となった時である。いずれも羌族の反乱が熾烈を極めた時期であり、現地の事情に詳しい王符の現状認識と対策案が馬融に影響を与えた可能性を考えてもよいのではないか。とくに武都太守在任期、馬融は西羌討伐に向かった西征將軍馬賢らの覆敗を正確に予測しており（『後漢書』馬融伝）、自身の言を借りれば「少くして学芸を習い、武職を更ざる」彼の的確な情勢判断の背後に、王符の影響を推測することも許されよう。彼が「広成頌」を献呈した元初五年はまだ武都太守赴任前ではあるが、最初の涼州滞在期、当時またともに二十代だった二人の、客気を帯びた思想交流が「広成頌」の尚武論にも影を落としている可能性を指摘しておきたい。

三 「広成頌」における軍事儀礼的要素とその構成

一章で確認した「広成頌」の内容の中から、儀礼的要素を順に抜き出すと次のようになる。

1. 十月の田獵の実施と、それに先立つ狩り場、獲物の準備。軍隊の隊列整頓。／2. 天子の出陣、軍令の宣布、兵士の出撃。部伍を組んでの獲物の掃討。／3. 狩猟後の悪鬼退散（大讎）、続く御苑の池畔での遊宴と瑞祥現出（百戯）。／4. 宗廟薦亨、論功班賜、酒肉の大饗宴。音楽の演奏、百姓との和同、四夷の来貢。

これを、先に一部は挙げたが、『続漢書』礼儀志中（以下、礼儀志と略称）の記す儀式次第と比べてみよう。

立秋の日、白郊の礼畢り、始めて威武を揚げ、牲を郊東門に斬り、以て陵廟に薦む。其の儀、乘輿は戎路に御

し、白馬に朱鬣、躬ら弩を執り牲を射る。牲は鹿麋を以てす。太宰令・謁者各の一人、載するに獲車を以てし、馳せて陵廟に送る。是に於て乗輿は宮に還り、使者を遣わし束帛を齎し以て武官に賜わしむ。武官は兵を肄い、戦陣の儀を習う。斬牲の礼は名づけて羆劉と曰う。兵・官は皆な孫・呉兵法六十四陣を肄い、名づけて乗之と曰う。立春、使者を遣わし束帛を齎し以て文官に賜う。羆劉の礼は、先虞を祠り、執事は先虞に告げ已り、鮮を烹るの時、有司告げ、乃ち逡巡して牲を射る。獲車畢れば、有司は事の畢るを告ぐ。

「広成頌」は田獵の開始を十月とする。前漢の司馬相如「上林賦」は初冬十月、揚雄「羽獵賦」は季冬十二月を田獵の季節として描き、後漢の張衡「西京賦」も孟冬十月とする。これらは『礼記』月令、孟冬の条に「天子乃命將帥講武、習射射御、角力」とある伝統觀念に従うものである。漢代でも冬月が刑殺の季節とされたことは周知の所である。一方で右掲の礼儀志は立秋、七月頃に斬牲・陵廟薦亨と武官肄兵の儀式を行うとし、これは月令・孟秋条に「天子乃命將帥、選士厲兵、簡練桀俊、專任有功、以征不義、詰誅暴慢、以明好惡、順彼遠方」とあり季秋条に「是月也、天子乃教於田獵、以習五戎、班馬政……」とあるのに近い。このように賦の描写と現実の後漢礼制とが齟齬を示す背後に、あるいは今古文など経学解釈上の分岐もあるのかもしれないが、今はそのことは措き、むしろここで注意しておきたいのは、後述のように「広成頌」の一連の儀式描写の最後が元会儀¹⁰を想定していることである。年度初めの盛大な朝見の儀、元会は前漢はじめには十月に挙行された（『史記』叔孫通列伝）。これは当初十月が歳首であったことによる。その後、武帝の太初曆導入により正月が歳首となり、その結果遅くとも後漢では元会も正月に開催されるようになった。孟春正月の盛大な元会の描写でフィナーレを締めくくるためには、一連の儀式の開始は秋より冬がふさわしいことになる。換言すればそうすることによって、右にまとめた1〜4の儀礼進行を一続きのものとして無理なく描くことができるのである。

礼儀志では、天子射牲について宗廟奉獻が行われ、その後に武官への班賜が行われる。おそらく天子射牲・斬牲・宗廟奉獻の一連の儀「獮劉」と並行して武官の軍事演習「乗之」が行われ⁴⁾、武官班賜はそれへの論功行賞として行われたのであろう。一方、「広成頌」では天子射牲と宗廟奉獻の間に大讎と百戯を示唆する情景が描かれる。そうしてさらに、大饗宴、音楽演奏と四夷来貢の場面が続くのである。これら、大讎から四夷来貢までの各段は右掲礼儀志の、立秋軍礼の一節には見られない。大讎は礼儀志では季冬十二月の条にこう記される。

臘に先んずること一日、大讎し、之を逐疫と謂う。其の儀、中黄門の子弟の年十歳以上、十二以下、百二十人を選びて俎子と為す。皆な赤幘阜製し、大纛を執る。方相氏は黄金四目、熊皮を蒙り、玄衣朱裳、戈を執り盾を揚ぐ。十二獸は衣毛角有り。中黄門は之を行り、冗從僕射は之を将い、以て悪鬼を禁中に逐う。…（後略）

この大讎の後に行われるのが歳末の饗遣故衛士儀であり、その際には礼儀志によれば次のように饗宴と作楽、角抵百戯が催された。

故衛士を饗遣するの儀は、百官会し、位を定め、謁者は節を持ち故衛士を引きて端門より入る。衛司馬は幡鉦を執り護行す。行定まり、侍御史は節を持って慰勞し、詔恩を以て疾苦する所を問い、其の章奏の言わんと欲する所を受く。饗を畢うれば作楽を賜い、観るに角抵を以てす。楽闋れば罷遣し、勸むるに農桑を以てす。

そして明けて元旦、元会の儀が開かれる。その儀式次第を礼儀志は次のように伝え、

毎歳首の正月、大朝を為し賀を受く。其の儀は、夜漏未だ尽きざること七刻にして、鍾鳴り、賀を受く。及び贄は、公・侯は璧、中二千石・二千石は羔、千石・六百石は鴈、四百石以下は雉。百官は正月を賀す。二千石以上は殿に上り万歳を称し、觴を御座の前に挙ぐ。司空は羹を奉り、大司農は飯を奉り、食宰の楽を奏す。百官は錫を受け宴饗し、大いに楽を作す。

さらに劉昭注に引く蔡質『漢儀』（正確には『漢官典職儀式選用』）は詳細を次のように記す。

正月旦、天子は徳陽殿に幸し、軒に臨む。公・卿・将・大夫・百官は各の陪位して朝賀す。蛮・貊・胡・羌の朝貢畢れば、属郡の計吏を見、皆な陛覲、庭燎す。宗室の諸劉は親しく会し、万人以上、立ちて西面す。位既に定まれば、寿を上る。群計吏は中庭に北面して立ち、太官は食を上り、群臣に酒食を賜い、西より入り東より出づ。御史四人は法を殿下に執り、虎賁・羽林は弓を張り矢を挟み、左右に陛戟し、戎頭は偃脛して前に陪い後に向い、左右中郎将は東南に位し、羽林・虎賁将は東北に位し、五官将は中央に位し、悉く坐して賜に就く。九賓の散楽を作す。舍利獸は西方より来たり、庭極に戯し、乃ち畢く殿前に入り、水を激えて化して比目魚と為り、跳躍して水を嗽ぎ、霧を作して日を韜る。畢れば化して黄龍と成る、長は八丈、水を出で庭に遊戯し、日光を炫耀す。兩大糸繩を以て両柱の間に繋ぎ、相い去ること数丈、両倡女は対舞し、繩上を行き、対面して道に逢えば、切肩して傾かず、又た躡局して身を出だし、形を斗中に蔵す。鍾磬並びに作り、倡楽畢れば、魚龍曼延を作す。小黄門は吹くこと三通、謁者は公卿群臣を引き次を以て拝し、微行して出づれば罷む。…（後略）

ここに見られるように、元会には百官四夷が来同し、酒食の宴が開かれ、散楽が奏でられ、そして瑞獸を模したかぶ

り物の変身技、綱渡りの曲芸などの百戯が盛大に催された。「広成頌」における饗宴、作楽、四夷来貢の描写が以上の歳末の饗遣故衛士儀から元旦元会の風景を踏まえたものであることは、ほぼ疑いない。

「広成頌」は後漢における秋から冬の一連の軍事的儀礼と、続く初春における天下来同の嘉礼（元会は後代の五礼では嘉礼に分類される）を踏まえ、詩的装飾を加えながらそれらを時間系列上に再編、接続し、文武両道の理想的あり方を描いたものである。天子田獵とそれに伴って行われる講武の儀礼は、神界巡幸と瑞祥の現出によって神聖化され、続く宗廟奉獻と論功班賜、盛大な饗宴が天子と兵士の秩序を確認し、楽の音が伝える天子の徳は海内百姓より四裔に到る天下の和同をもたらす。こうして田獵講武の軍事儀礼は、天子の徳化によって海内天下を秩序づけるための起点として位置づけられたのであり、その背後には西羌兵乱などの外患、皇帝権威の衰微という内憂に対する馬融の危機意識、また東觀校書の中で培っただろう国家の典制への思念が―王朝が衰亡に向かいつつあればこそ―あったに違いない。

注

- (1) 池田秀三「馬融私論」〔『東方学報』五二、一九八〇年〕、蒋晓光《『広成頌』与東漢礼制及賦体文学的変遷》〔『文史哲』二〇一一―二〕。
- (2) 「広成頌」の尚武主義については、先掲蒋氏論文が当時の鄧太后専権ならびに西羌反乱との関係で論じている。本稿の指摘も一部に蒋氏の所論と重複する所があることを諒承されたい。
- (3) 池田氏先掲論文、および呉從祥「馬融年譜」(黄山書社、二〇一九年)。
- (4) 拙稿「胡広『漢官解詁』の編纂―その経緯と構想―」〔『史林』八六―四、二〇〇三年〕、のち拙著『漢六朝時代の制度と文化・社会』(京都大学学術出版会、二〇二一年に再収)。
- (5) 『長沙五一広場東漢簡牘』(中西書局、二〇一八年) 2010 CWFJ 1③: 201-21, 22簡。积文の掲載は省略する。
- (6) 饗遣故衛士儀については志野敏夫「漢の衛士と「饗遣故衛士儀」」〔『早稲田大学大学院文学研究科紀要』別冊第十一集、哲

学・史学編、一九八四年）参照。

- (7) 大室幹雄『劇場都市 古代中国の世界像』（三省堂、一九八二年、ちくま学芸文庫に再収）。
注(4)先掲論文。

- (9) 拙稿「後漢時代の軍事思想に関する管見」（『関西学院史学』四八、二〇二一年）。

- (10) 漢唐の元会儀については渡辺信一郎『天空の玉座 中国古代帝国の朝政と儀礼』（柏書房、一九九六年）参照。

- (11) 後漢の乗之と獮劉の礼については Denk Bodde, *Festivals in Classical China*, Princeton Univ. Press, 1975, 志野敏夫「漢の都試―材官・騎士についての再検討―」（『東方学』八九、一九九五年）に詳し。

本稿は JSPS 科学研究費補助金基盤研究 B 「中国古代軍事史の多角的検討―「公認された暴力」のありか」（研究代表者：宮宅潔、課題番号一九H〇一三一八）による研究成果の一部である。

——文学部教授——